

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382
京都市南区吉祥院石原上川原町21
<http://www.creates-k.co.jp>

クリエイツかもがわ



TEL 075 (661) 5741
FAX 075 (693) 6605
送料何冊でも240円

ソーシャルワークポケットブック

◎社会福祉ではたらく人に贈る！

パワーとエンパワメント

シヴォーン・マククリーン／ロブ・ハンソン◆著 木全和巳◆訳 1600円+税

今、立憲主義をないがしろにする大きなパワー（権力）がかけられている。家族や職場の中で起こる虐待、ハラスメントなどのパワー乱用が顕在化。パワーの機能と構造に着目し、人権と社会正義に根ざした本来のパワーを促すエンパワメント実践が求められている。



認知症と共に生きる人たちのための パーソン・センタードな ケアプランニング

ヘイゼル・メイ／ポール・エドワーズ／
ドーン・ブルッカー◆著
水野 裕◆監訳 中川経子◆翻訳

認知症の人、一人ひとりの独自性に適した、質の高いパーソン・センタードなケアを提供するために、支援スタッフの支えとなるトレーニング・プログラムとケアプラン作成法！

2600円+税

付録
CD

生活歴のシートなど
すぐに役立つ使える
「ケアプラン書式1」

認知症の人の医療選択と 意思決定支援

本人の希望をかなえる「医療同意」を考える

成本 迅◆編著

医療者にさえ難しい医療選択は、どのように説明すれば認知症の人でも理解しやすくなるのか？
——家族や周りの支援者は、どのように手助けしたらよいのか。もし、あなたが自分の意向を伝えられなくなったときに備えて、どんなことができるかを考える。

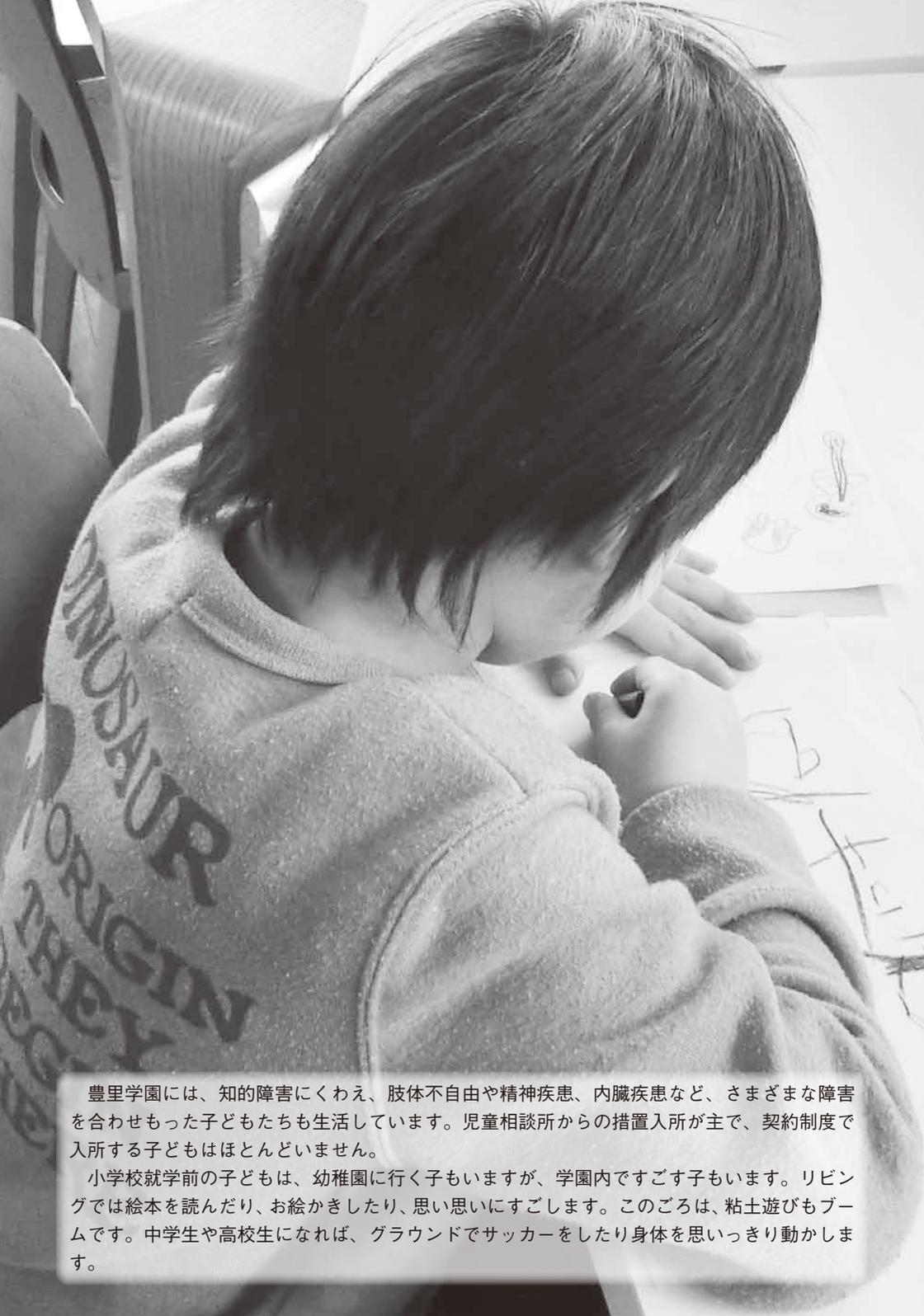
2200円+税



あたりまえの生活ではぐくむ 生きる力

——福祉型障害児入所施設・豊里学園の日常——

豊里学園（大阪市旭区）は、3歳から18歳までの知的障害の子どもたちがぐらす定員70名の福祉型障害児入所施設です。2012年11月に施設の建て替えをおこない、六つのユニット化が実現しました。各フロアに食堂とキッチンをつくり、クッキングを気軽に楽しめるようにしています。幼児がぐらす「星」グループでは、みんなで夕食のカレーづくりをしました。みんなでつくと、苦手の野菜も食べられるから不思議です。



豊里学園には、知的障害にくわえ、肢体不自由や精神疾患、内臓疾患など、さまざまな障害を合わせもった子どもたちも生活しています。児童相談所からの措置入所が主で、契約制度で入所する子どもはほとんどいません。

小学校就学前の子どもは、幼稚園に行く子もいますが、学園内で過ごす子もいます。リビングでは絵本を読んだり、お絵かきしたり、思い思いにすごします。このごろは、粘土遊びもブームです。中学生や高校生になれば、グラウンドでサッカーをしたり身体を思いっきり動かします。



「いない いない ばー!」。おやつ後のひととき、職員も「ちゃんと片づけて～」と言いつつ、ふと笑ってしまいます。子どもたちとゆっくりと食事やおやつを楽しむのは、とても大切な時間です。

建て替え前の大きな食堂では、大勢の子どもたちが入れ替わり立ち替わり食事をするため、落ち着かない空間で「出されたものを食べるだけ」でした。いまは、食事を「つくる」「もりつける」、おいしく食べたあとに「かたづける」といった過程も楽しみながら、食事ができるようになりました。



豊里学園では、食べることを通じて子どもたちの成長をはぐくむ「食育活動」にとりくんでいます。食材を育て、素材にふれることで命の大切さを理解し、料理にこめられた愛情を感じながらいただくことは、子どもたちの生きる力をはぐくむことにつながります。「あたりまえの生活」は、いつか社会に出ていく子どもたちをささえるたしかな力につながるので

す。(写真 吉迫宣俊、コメント 北口美弥子) ※52頁に関連記事があります。

●特集● 施設で生きる子どもといっしょに明日を生きたい

【基調報告】子どもは本当に大切にされているのか	奥野 隆一	10
地域・社会とつながる役割を担う乳児院	鳴川 真弓	12
生きづらさを抱える子どもたちのこれからをどう支えるのか	小倉 康司	14
現場の実践を支える制度設計を	藤野 謙一	16
子どもたちの苦しさを少しでもやわらげられる支援をめざして	尾道 敦子	18
保育士に求められるソーシャルワークのスキル	吉永みゆき	20
【討論】貧困の連鎖を断ち切るために、児童福祉施設は		
どのように子ども・親に向きあっているのか		22
施設紹介		26

●トピックス●

福祉と憲法 憲法を暮らしの中に生かす	大矢 暉	30
手話ができるホームヘルパーさん同行記	中島 素美	34
「介護職員等の処遇改善法案」を通して		
福祉現場の低賃金問題を考える	塩見 洋介	40
家族の「責任」を問う前にすべきこと	日下部雅喜	44
生活保護受給者の生活と人権を守る	岡 晃敏	48
社会福祉からみた「マイナンバー」の危険性	西村 憲次	50
グラビアの現場から	吉迫 宣俊	52
第22回社会福祉研究交流集会 in 京都		54

●連載●

フォーラム 介護保険対象外の問題	河合 克義	58
相談室の窓から 小さな変化や成長を大切に	青木 道忠	60
ソーシャルワークの原点と息吹を感じて（最終回）		
——World Social Work Dayによせて——	伊藤 文人	62
育つ風景 いま保育園は	清水 玲子	64
「助けて！」って言ってもええねんで！		
親が親になれない状況が増えているなかで	徳丸ゆき子	66
全盲夫婦の出会いから 二人三脚のあゆみ	千田勝夫・網枝	68
移動の自由をもとめて（2）——安心して街を歩きたい！		
映画案内 『アメリカン・スナイパー』	吉村 英夫	70
現代の貧困を訪ねて	生田 武志	72
野宿者テントの強制排除が行なわれた		
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート（新連載）		
【第1回】似顔絵～似らすとれーしょん～とは？	ラッキー植松	74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	76
花咲け！男やもめ	川口モトコ	77

●表紙の絵●
神門やす子



若い職員が学び行動する 姿に刺激を受けて

全国児童養護問題研究会第45回記念大会
現地実行委員長

なるかわ
鳴川

まゆみ
真弓さん

小さくて愛らしい子どもたちに出会ってしあわせを感じていた矢先の六月の早朝、わが家に乳児院の夜勤明け者から「子どもが呼吸をしていない！」という電話が入りました。職員の初期対応が功を奏し、子どもの命は無事でしたが、この一件を皮切りに、それまでとはちがった体験がつつきました。虐待や覚せい剤使用など、保護者の状況によって緊急に対応しなくてはいけない場面もあります。出勤すると、前夜に警察から直接子どもが入所してきていたこともあります。経済面、人間関係、健康面などに支援が必要な保護者への対応に追われる日々ですが、乳児院の職員はいつもやさしくいてねいに対応しており、その姿をみる私も、この仕事の社会的使命を強く感じているところです。

いま、子どもの六人に一人が貧困家庭で生活しているといわれ、さらに家族一緒に暮らせない子どもたちの受け皿として、社会的養護施設が存在しています。全国児童養護問題研究会(以下、養問研)は、一九七二年の第一回大会から「福祉と教育の統一をめざして」と「未来をになう子どもたちに 仲間とつくりよう豊かな実践を」というスローガンのもと、子どもたちやその家族、そして社会的養護をになう職員の人権保障をかけた、そのために民主的な職場づくりをめざし、日々研究と実践を積み上げています。乳児院ではほぼ毎月、養問研の会員が集まって学習会しており、私もそのメンバーの一人です。テキストを使つての討議は、保育現場での実践経験がない私にはとても新鮮で、楽しいひとときです。



なるかわ まゆみ

1975年4月大阪福祉事業財団入職。1994年7月まで福祉型障害児入所施設「豊里学園」で指導員として勤務。その後「すみれ共同作業所」に異動し、2009年～2012年まで同施設で施設長を務める。2012年4月より、すみれ乳児院施設長。

昨年の養育研全国大会兵庫大会にはじめて参加し、自らの意思で「学ぼう！」と参加している人たちの熱気に圧倒されました。その全国大会が今年は大阪で開催されることになり、私に現地実行委員長になってほしいとお話がありました。社会的養護の分野に足を踏み入れたばかりでしたが、乳児院の若い職員たちが大会事務局の一員になっていると聞かされ、やるしかない！と引き受けました。若い職員たちが自分の職場のことだけでなく、広く・深く学ぼうとしている姿は頼もしく、今後大きく羽ばたいてほしいと願っています。

今回の大会の講座や分科会のテーマはどれも興味深く、熱心な討議が展開されると期待しています。今回は大阪が開催地であることと、四五回という節目の大会であることから、本大会の前日（七月一日）にプレ大会をおこないます。大阪市西成区の日雇い労働者のまち・釜ヶ崎を歩きながら、子どもの福祉についていっしょに学び考えるツアーと、釜ヶ崎で暮らしている子どもたちの生活を支え、子どもたちにとって住みよいまちづくりに取り組んでいる、「NPO法人こどもの里」理事長の荏保共子（しんぼともこ）さんの講演を予定しています。

本大会は、七つの児童福祉講座と一五の分科会を予定しており、それに先立つ記念講演では、子どもの貧困についての第一人者である松本伊智朗さん（北海道大学大学院教授）にお話していただきます。会員以外の方の参加も大歓迎、多くの方のご参加をお待ちしています。



特集 施設で生きる子どももつくりこぶに 明日を生きたい

「子どもの貧困」ということばが最近よく使われます。

さまざまな分野・領域で、その子が認識しているかどうかは別にして、子どもが抱えている「子どもの貧困」の実態を、社会的孤立や児童虐待としてもとらえるとりくみが拡がってきました。統計調査結果から実態にさかのぼる講演やシンポジウム。テーマに絞った出版。そしてこの分野でよく登場する人びと。社会問題として注視されることは大切なことです。

もちろん、子どもだけが貧困なわけではありません。しかし、明日があるはずの子どもに、明日の希望の扉を閉ざしている現実。その告発は、まだまだ不十分であると思います。

社会保障体制の再構築を謳ったいわゆる「九五勧告」以降の、一〇年から二〇年にあたるこの一〇年間、スクールソーシャルワークの存在や配置の拡大、研究調査交流の拡がり、そして制度化。その拡がりには、学校現場だけでなく、社会福祉施設としての保育分野にも視点を拡げ、支援のありようの探求、地域社会においては地方自治体で孤立するシングル親への保健福祉訪問活動が行われるなど、拡がりをみせています。虐待対策ともつながった施策です。

東北の震災で親や家族を失った子どもへの生活の場の確保、支援。さまざまなとりくみの拡がり。しかしこれらの子どもが抱える、背負っている社会問題、生活問題が解決されたのか、問題がなくなったのかは、読者が知ると

ころです。

本誌は二〇〇八年一〇月号で、「容認できない子ども時代の不平等、不公正の実態と解消のために」の特集にとりくみ、子どもの視点から貧困の再発見を提示しました。山田勝美さん（当時山梨立正光生園園長）は、「子どもたちは親の都合で施設に入所するという事実。つまりこの時点で、子どもたちはすでに自分の人生が自分の力ではどうにもならないこと、誰もあてにできないことを学習している可能性がある」「このあてのなさは、施設入所後に解消されねばならないが、その解消は難しい。その困難さとして、まず指摘しなければならぬのは進路である」と指摘し、大学進学や高校卒業後の退所問題を紹介しています。最近は少し変化しつつも、生きづらさ自身が解決されたわけではありません。

さまざまな分野で、領域で、地域で、学園で、孤立や貧困の発見を意識的にとりくむ活動は、以前よりも拡がってきています。しかし「一億総活躍」と言いながら保育所に入れない現実と同様に、この問題が問題化されても、解決の方向に光が注がれるには、まだかなり距離がありそうです。

一言では説明できない子どもが抱えた、背負った荷物。その荷物がゆえに、心を閉ざす子ども。それでも、実習や社会的関心から児童養護で働きたいと、入った若者が、そのあまりにも大きな荷物に、いっしょに向き合うことを最初は戸惑いながらも、そこにいっしょに身を置くことを決意する姿を見ました。

児童福祉施設の扉をくぐる子どもは多くはない。しかしそこから、社会が学ぶこと、考えることは少なくないと思います。今回のテーマは、光なきものと共に生きる人たちからのメッセージです。もちろん、そのままでは決して届かなかった光を浴びることを願って――。

（編集主幹）

